

武家女性の社会を捉える眼

——『塵塚日記』の検討から——

菅野 則子

はじめに

最近女性の日記の発掘が進められ、江戸期の女性の姿も多様な側面から捉えられるようになってきている。ここでは、幕末期の「上級武士」の交流日記であり、接待記録であるといわれている『塵塚日記』をひもときながら、幕末期の一武家の様子と武家女性の社会を捉える眼とを検討してみたい。

一 『塵塚日記』の概要と筆者について

本日記は、慶応二年四月二十五日から同十二月三十日までの九ヶ月間の記録である。これを記録するに至った

経緯を筆者は次のように記している。

(前略) わが兄君のぶんがくと、又さいのふにひいで玉ふを、しとふてくる人たえまなく、かつわがけな(家内)い
のあいそよく、人をあいするところにつれて、門ぜんさながらいちのごとく、まい日まい日たへまなく、
くる人ごとにものをくれるを、世にうへもなきたのしみとす、かか(家内)るけな(家内)いにもあるなれば、その中のむ
つまじきこと、画にあらわせしとふりと見たまへ、われもとよりおろかにして、けふ(今日)のことをけふわする
るゆへ、よろずちやうめんをこしらへしに、兄君みたまいて、かか(家内)るかきようなるものは、ちやうめんと
はいはざるなり、「ちりつかにつき」と、つけよかしと、かき玉いぬ、しかはあれどもわれながらいとおし
むべし、かみとふで、いとおろかなるかなしさは、わすれぬ(咄嗟)為とさにかきしるしはべるのみ
(慶応) けいおふ二年う月吉日

東山女 春女 廿三才(註一)

この時、二十三歳であつた筆者の「東山女 春女」は、兄を慕つて訪う人が多く、それらの訪問者とその際の贈答などの備忘録のつもりで日記を書き始めたという。(註二)

春女(以下「春」と記す)の生家甘糟家は、米沢藩の「上級士族侍組」に属しており禄高は二〇〇石であつた。春の兄は甘糟備後継成といい、『鷹山公偉蹟録』(註三)を九年の歳月をかけて手がけた人として名高い。彼は、十歳で、米沢藩校興讓館に学ぶことを許され、嘉永元年(一八四八)十七歳で家督を継ぎ、安政四年(一八五七)学館諸生、同五年定仮助読、同六年友于堂助読、そして、慶応元年記録所頭取に任命され、その立場上藩史の編纂を手がけることとなる。慶応四年戊辰戦争勃発と同時に軍務参謀を命じられるが、多忙の中『北越日記』



甘糟家だんらんの図（春女筆）

を認めている。明治二年七月侍詔院出仕を命じられるが、同年十一月病没、三十八歳であった。

このような兄であったため、弟子たちをはじめ藩士たちの訪問が絶えず、その度に寄せられる到来品の收受や訪問者への接待などが甘糟家の日常であった。そんな様子を書き留めておこうとして日記は書き始められた。

筆者の春は、兄の影響もあつてだろうか、日頃から和歌や絵画を嗜み、歴史や文学を好んだという^{（註4）}。

その春をとりまく背景についてみておかなくてはならない。当時の、甘糟家は、春が描いた上記の絵からも分かるように、兄継成（三五歳）を中心に、母（五三歳） 畠山外記義郷の娘）、兄嫁（三二歳）、長女なべ（一三歳）、長男竹太郎（一一歳）、次男千代吉（八歳）、三男三郎（四歳）、そして、筆者本人の八人家族であった。そのほかに使用人がいたと思われるが、それについてははっきりとしない。ひょう助と藤蔵とい

う「召使い」を置いていたことが行論から分かる程度である。そして、後述するように甘糟家に出入りする者は、「上級士族」の侍組からはじまる藩閥系の仕事に関わる者をはじめ兄の許に書き物を習いに来る弟子^(註5)、親戚の者、そして知行地の農民に至るまで多彩であった。

とりあえず、この『塵塚日記』から、例示的にいくつかの部分を抄出してみよう。

① 四月廿九日 てんき

畠山のおばなべ吉を連れみやげにせんべい・にしん十五本・ようかん一本を持ちきます。二本松のおばおわさ・おみやを連れみやげにせんべい・玉子十五持ち来ます。

もてなしほ立貝の皿もり・にしんの煮しめ・茶菓子ぼたもち。春日のおまつさゝぬぎにきたりぬ。みやげに白せつ一本、しんかいきんや・井ノ内きんぢ・向へのばば・お竹・二本松老母、神保へ行きし帰りかけとて寄る。此日きたる人みなぼたもちを食ひ行きし人なり。

② 七月廿八日 てんき

いまだ御ふれ出しにはならざれども、將軍様脚気のしようしんとか云う病をやみてかくれさせ給ひぬといふ風聞しきりなり。又一説に六月六日酒をのみ過ぎて夕ぐれにかくれ給ひぬとも聞えぬ。何れにしても大変なること也。

長州はますます盛んにしてこれ迄の戦ひ数度に及べども一度もおくれを取らず、却つて隣り国をねらひよほど取りたるとぞ。かかる世の中に將軍かくれ給ひなばこの末いかが成り行く事やらん、と皆申しけ

り。

大坂米の高きこと百文に七勺、上酒は壹合にて貳百八拾文なるよし。上方は上はた(旅籠)壹マ八百文、中は一マ四百文、下は一マ貳百文なるとぞ。江戸米少し安くて百文に一合七勺なり。

③ 八月十六日 大雨

町中の米屋マに米なくして御家中大難儀。それにおかみより御払い米は昨日より一向に出来ず。こは何の為といふに、勘定頭の方にては今米を出さざる時は一日にも米十二マになるべしと云う見つめなりといふ取沙汰なりとて、皆お上を恨み勘定頭小林五平を憎むこと仇敵のごとくにて、はがみをなし恨まざるもの更になし。

小田島へ姉おぼこなし見舞にあじのはまやき貳拾と菓子一本もちて。

④ 十二月三十日 天気

大晦日とて忙しきことはなはだし。岩井孝四郎・佐藤孝太郎・平田駒太郎・大滝初弥にて中折八帖持ち来る。櫻村医者貳朱持ちくる。小島大助中折一帖もち来る。渡部もかつを一本と中折一帖、寺島は菓子壹本、北村はかつを二本、五十嵐けん蔵は、さは菓子一本なり。千勝院小つがる壹束、内村洋庵菓子貳本、千坂みち四郎より貳朱、宮島喜四郎大つかる壹束、小田島より手ぬくひ一つ、くず粉一袋、わがところより隣へ中折式帖かつを二本やる。武田への歳暮貳朱と中折三帖やりしに、塩ます一本くる。

此ほかにもいろいろ事あれども忙がしきに取紛れて書かず。家内八人召使ふ者二人にて上下十人、目出度く帆立貝のひら・しほひき・いとながマと糸をひけて納豆・豆腐の汁にて皆茶の間にてさんことをな

し、塩ます・さばをいたゞき肴となしていとむつましく

年取りぬれば子供ら四人、豆をまくとて異口同音に大声をあげ、福は内、鬼は外とぞばら〜とまく
豆もいと〜目出度おぼゆ。炉には大割をくべ、うちより目出たき事のみ語りあひ、うち興じつつ明日の元
日詣りにき(虫くじ)□めでたかりける次第なり。

頃はう月中的ころより書きそめ、つもり〜て年のおはりまで書きぬ。ここらは筆の納めとて又も〜と
書き綴らば、あとよりぼろのさがるべしと、目出たく年の暮に筆を納めぬ。目出たし々々々々。

おはり

以上四つの記事を例示してみた。①は、人の訪問について記されている。訪ねてきた人の名、その時の持参品などを記し、同時に、訪問者へのもてなしなどを記したものである。本日記ではこのような内容のものが最も多い。②は、いろいろな風聞を記したものである。江戸・大坂・長州と広範囲に及ぶ記事が見られる。また、末尾には米・酒や旅籠代などの相場を記すなど筆者の関心のあり方を知ることが出来るものである。③は、生活に密着したところからの関心が、権力への批判につながっていくような視点を含んだものである。④は、この日記の末尾に当たるものであり、歳暮のやりとりをはじめ甘糟家の一年の締めくくりの一端を知ることが出来る。本来であるならば、かなりのスペースが割かれるところであろうが、年の暮れの忙しいさなか、記事は大幅に省略されていくようであるが、つつがなく一年を終えて、新しい年を迎える心構えのようなものも垣間見える。大晦日、年越しの食卓を家族で囲む様子、新年に向けてこれから次代の社会を担っていく子供を中心とした家族結束の決意など武家社会における年末の過ごし方の一端を知る事も出来る。そして、最後の二行は本日記の掉尾を飾

るものであり、四月から書き始めた日記を年末まで書き綴ってきたが、年の暮れとともに自分の筆もここまでにするとし、連日のように書き続けた日記の書き納めをした。それまで張りつめていた緊張が解け、肩の荷を下ろした春の安堵感が伝わってくるようだ。

二 交流と接待

甘糟家は^(註6)二〇〇石とはいえ、米沢藩においては、上級に属しており、当主の甘糟備後は、藩政とも密接に関わる存在であったことはすでに述べた^(註7)。

そうした甘糟家には多くの人々が訪ねてきている。この日記の中に記されている人名を数えてみると、優に百名を上回る。とりあえず、甘糟家と行き来があったと思われる人たちの中で、その出自が分かるものを列記してみよう。

(侍組)

一五六五石・千坂伊豆(与一)(夜話)、五〇九石・春日主膳、五〇〇石・島田・沢根左膳、二五〇石・井上はやと・倉賀野主殿・島田、二一六石・大室大八、二〇〇石・宮嶋掃部(夜話)・宮島たのも・菅名但馬・甘粕主税・本郷兵馬(ともの介)・国分大蔵・岩井信蔵・保科金太郎・杉原石見(茂憲守り役)・新保左馬之助(小姓頭)、一二〇石・清野右膳・清野国松・柿崎和泉、?石・大河原勘兵衛(躰方の家)・保科力馬

(与板)

二〇〇石・すとふ(須藤岩太郎)・小島大八・鈴木けん助、五〇石・ばん次郎右衛門・香坂熊太郎(勘解由支侯小姓)・高坂為蔵(興讓館諸生)、二五石・清水つもり・小嶋大助・堀江勇作、七石五斗・遠藤吉太郎(記録方 二人扶持)、七石・立岩小太郎(三人扶持)、?石・滝沢てい助

(馬廻)

二〇〇石・若林作兵衛・長右馬之助、五〇石・しんかい(新貝)・北村徳太郎・古海初衛・相浦かんぞう、二五石・小黒平馬・舟橋みち助・堀江勇作

(五十騎)

九〇石・穴沢ぜん左衛門、五〇石・高村新八・神保虎太郎・登坂吉蔵、二五石・登坂てい吉・佐藤伴左衛門(造塩硝御用掛)・丸山又四郎・池田丈八・佐藤弥太郎(興讓館諸生)

たちがそれとして確認される。これからもわかるようにその多くは、上級・中級の藩士であった。(註8)

また右の外に、島田太門(郡奉行 二五〇石)・黒井小源太(御使番 二〇〇石)・武田大勝(高家 五〇〇石)・二本松右京(同 二〇〇石)・田中又右衛門(記録方 八〇石)・小田島(御小納戸組の士)・有壁げんしん(外様法体 一〇〇石)・草刈道格(同 五人扶持)・植木三吾(御堂給仕 三石五斗 一人扶持)・曾根敬一郎(友于堂議長)・上泉直蔵(六人扶持)らの名前が確認されるとともに、出自などが判明しない多くの者たちの名前が訪問者として登場する。又、行き来の可否は定かではないが、話題の中には色部御家老(侍組 一六六〇石)・荏戸孫惣(同 五五〇石)・大國筑後(同 二五〇石)・広居若狭(同 二五〇石)・桜井市兵衛(与板 二

〇〇石）・松本誠蔵（与板 五〇石）・静田てつ太郎（同 五〇石）などの名前がみられる。

かれらの訪問の用件についてはあまりはつきりとした事は記されていないが、後述するように藩政に関わる諸情報の交換がその主なものであったと思われる。

（一）日常の交流と接待

冒頭（一の①の引用）に記したように当家には常日頃から人々の訪問に際しては、茶菓をはじめ食事などをもてなすのが通例になっていたようである。訪問者は、兄の所へものを習いに来る人や藩士をはじめ親戚・村人たちと多様であったことはすでに述べたが、そのもてなしの仕方は必ずしも一様ではない。記録されている限りで見ると、とくに甘糟家より「下」と思われる人々に対しては、必ずといってよいほどに米飯や茶菓を振る舞っている。^{（註⁹）}しかし、その場合の振る舞いはあり合わせの物で賄っている。一方、同等乃至上層と思われる人の接待には、それなりの心遣いがなされているようだ。当家の接待の参考にでもするかのように、兄が他家を訪問したときに受けた接待の様子に春は留意している。春自らは余り接待される機会がないためだろうか、しばしば接待されて出向いていく兄から、恰も他家のおもてなしの作法を学ぶかのように訪問先から戻るやその様子を詳細に聞き出しては記録している。以下、家族（主として兄であるが）が他家へ出向いた折にふるまわれた馳走の様子をみてみよう。

①「母君あちこちへ行きます。いかとせんべい・^{（唐）}から糸を持ち本郷へ行きます。もてなしに最中・まんぢう・

時雨の松・ささがれいの煮たものにて茶出でたる由。それより保科へするめ・せんべい・菓子一本・袖

口・塩引・唐糸をもち行きます。兄君も行きます。ごちそうは帆立貝の皿盛、あじのひら、なまりのかつを皿盛、しゐらの吸物、烏肴帆立貝のつぶつぶ煮、きじみこんぶへにしん、菓子だんごなり。又、それより二本松へいか・せんべい・菓子一本・袖口・から糸二百目みやげにもち行きます。馳走はささかれないの平に、鳥貝の皿もり、玉子のすい物なり。菓子は松風・いくよ餅・まき煎餅なりし」（七月二十四日条）

② 「兄君小幡町奉行へ行きます。初たけの吸物、とり貝の煮しめ、ささがれいの皿盛、すずりぶたなまずのかばやき、鯛の浜焼、とりいか・かんでん・まきずし・白ぶどう・梨・玉子とじ・たこのさしみ、ちつとしたふるまいにもかかる料理なり」（八月二十七日条）

③ 「兄君目黒利兵衛へよばれ行きます。いか・菓子二本とを土産持ち行きます。あちらよりの御馳走はとりの吸物、かれないのひら、から貝煮しめ、又すずりぶた・すし・鮭の小ぐし・鳥貝・なし・かんでん・白ぶどう・てりいかなり、どじよう・たこもあり」（十月十五日条）

④ 「兄島田へ行きます。御ねんの入りたる御馳走にて鯉・うなぎ・とりの平・又かれないの皿盛まし書かずこれにより嶋田へ菓子一本とごぼうをやる」（十一月三日条）

⑤ 「兄古海へ呼ばれ行きます。上品なる御馳走なり」（十一月二十九日条）

⑥ 「昨晩兄君、丸山駒太郎へ飯前より夜話に行きます。御馳走あぢ鯛の浜焼・はえ・鳥貝・どじようにてうどん・さかなのましはぐだくしければ書かず。」（七月十九日条）

などが、お呼ばれされた先の馳走の様子である。①母と兄とが親戚を訪ねたときの様子を記したもので、その時の土産と先方の接待の様子が記される。②く⑥は、兄がお呼ばれされたときの先方の接待、とくに馳走の様子が

語られる。帰宅後、春は、兄から馳走の内容を詳細に聞きただしたことが分かる。恐らく、兄も十分に答えられないこともあったようで、⑥のように、「くだくだしければ」云々は、兄とのやりとりの様子が推し測られる。

春の感覚からみて②の「ちっとしたふるまい・・・」⑤「上品なる・・・」などと記しているように、よりよい接待のあり方を模索しているかのようにも思える。単にご馳走に関心があるというのではなく、甘糟家としての接待のあり方、他者と比較して見劣りのしないような確としたものを保ちたかったのであろう。それ故に、兄からいろいろ聞き出しては当家のもてなしの参考にしようとしたものであろう。

一方、当家側の場合、日常的には簡単な茶菓や、酒飯でもてなすことが多かったが、当家が人を招待したときには、かなりの心遣いをしているのがわかる。

⑦「江戸より下りし故、尻高小太郎・堀部勇作を呼ぶ。煮しめぼうたら・ひらかれい・吸物・鳥・すずりぶた・いか・小鳥てりいか也」(十月三日条)

⑧「立岩小太郎江戸より下りしとて来る。からかいのにしめ玉子の吸物にて酒を飲まず。保科藤蔵ひる飯を食い行く。大根あえものとひらきにて。夜千坂与市話に來ます。どじょうの吸物、隣よりもらひしすずりぶた・煮しめ・菜いり・菊のひたしにて酒出す」(十月六日条)

⑨「町奉行小幡けん吾、御使番黒井小源太を呼ぶ。さけのひら・たこのさしみ、かれいの皿盛、鳥の吸物、からかいの煮しめにて。小幡の召使に酒を飲ませる。」(十月十七日条)

などである。その中で⑧の記事が留意される。前半には先方から訪ねてきたり親戚の者たちへのもてなしの様子が記されているが、後半はやや趣を異にする。千坂与市が夜話に來ている。夜話については後述するが、当家よ

りかなり上層に位置する千坂の訪問に対しては当家も少なくない気遣いをしなくてはならなかったと思われる。
⑦・⑨は、当家が招待した場合のものであり、通常の扱いより盛大に振る舞っているのがわかる。

これらから見ると、日常の交流・接待がスムーズに行われていったその背後には、日頃からの春たちの意識的な配慮があったからにほかならない。このように日常的な交流・接待を維持していくことが、武家が武家としての家格を維持し、家継統をはかつていくための重要な環であった。甘糟家の場合、それを支えていたのが、春をはじめ母や、兄嫁たちであり、このようなことを支障なく遂行していくことが武家女性たちの重要な役割であった。

(2) 兄の病氣とその見舞い

日記の中で注目されるのが、兄の病氣に関する記事である。甘糟継成の病氣について、その病名ははつきりとはしないが、「きのふより兄君不あんばいにて不参」（六月八日）にはじまり、七月十日条の「兄君ようようよくなり給い、今日出勤」まで、実に一ヶ月余の病であった。その治療と思われる記事がいくつか見られる。「須藤岩太郎もみに来る」（六月八・九日）、「草刈道格の」弟子でもきりすてるをかけに来る」（六月十二日）、「草刈見舞に来る（中略）きりすてるをかけにでも来る」（六月十四日）、「草かりへ迎えをやり来る。弟子も来り、きりすてるをかける」（六月十七日）、「草刈来る（中略）弟子も来る」（六月十八日）、「草刈弟子来る」（六月二十二・二十四・二十七日）などの記事から次のようなことが分かる。不調になったはじめの頃は、須藤の「もみ」療治を行っているが、のちになって、「きりすてるをかける」という方法に変えられている。これは吸引の療治

と思われることから甘糟の病気は、呼吸器系の病気であつたようだ。そして、草刈道格とその弟子たちによつて治療が施されているのがわかる。草刈道格というものの存在も今ひとつはつきりしないが、(註10) 六月十七日には、草刈に往診を依頼していることからみると、恐らくは藩の医療に関わる者であつたと思われる。

ともあれ、六月八日から七月十日までは、春の兄が病気で臥せていたために、多くの人々が甘糟家へ見舞いに訪れている。記事を検討すると、黒井小源太が七回、猿橋吉太郎・清野右膳が六回、草刈道格が五回、保科藤藏・舟橋道助・高村新八らが四回、畠山泰助・千坂い三郎・保科力馬・立岩小太郎・滝沢い助・佐藤伴左衛門・大室大八・香坂熊太郎らは二、三回、さらには甘粕主税・田中又右衛門・井上隼人・倉賀野らの名も見られる。この一ヶ月余の間に六十人以上、延べにすれば百人を上まわる人びとが、甘糟継成を見舞っている。

彼らの多くは、上記したように、同僚の藩士たちであり、しかも、見舞いとはいえ、一ヶ月余の間に同じような人が何度も訪ねてきているところからすると、単なる見舞いに留まるものではなかつたように見える。恐らくは、藩政に関わる事柄の情報交換、と言うよりはむしろ、甘糟の意見などを求めに來たものではなかつたか。恰も甘糟継成が藩政遂行にとつて、欠く事の出来ない存在であつたかのである。本日記には直接そのような事が記されているわけではないが、そのことを裏付けるような記事がこの時以外の随所にも見られるからである。たとえば、上層の人から「夜話」に呼ばれたり、逆に、幾人もの人が「夜話」と称して訪ねてくる事も少なくない。

また、この期間に見舞いとして訪ねてきた人と、見舞い品として贈られたものを見ると、延べ五八人から次のような品々が寄せられている。菓子類二二件、そうめん・ひやむぎなど一四件、玉子一二件、この三種が見舞い

品としては突出している。そのほかに砂糖・白玉・くず粉など五件、鯉・どじょうなど魚類八件、野菜・果物三件、その他三件である。菓子が多いこと、時節柄そめんが多いことはともかくとして、玉子や魚類などの見舞品が多いことは時代を反映しているといえようか。

いずれにせよ、見舞いとはいえ多くの人の出入り、それへのもてなしについては一方ならぬものがあつたようだ。その記述の一部を示すと「高村・黒井・小島・たかさか・草刈来る。もてなしねり羊羹・白雪・時雨の松・カステラにて茶なり。清野国松時雨の松二本もち来る。畠山伯父君鯉耆尾見舞いにもち来ます。伯父君に玉子七ツやる。この人々へ前の菓子もてなしなり。保科へ先日もらひしあぢをかえす。武田へ菓子一本やる」(六月二十三日条)のようであり、見舞客へのもてなしの大変さが言外に語られている。もてなしは、春をはじめ母や兄嫁によつて行われたものと思われるが、接待の混雑さも勿論であるが、寧ろその経済的負担が当家にとつては大きな問題であつたようだ。

一ヶ月余の闘病生活のち病気が治癒するが、その時の日記には快復を祝し餅をつき関係者に配っていることが記されている。しかし、よろこびの一方で、費用の負担についてもしつかり書きとめている。餅配りをした人たちのリストを記した後に「おかしきことを書くようなれども、その節もち米一升式百九拾文のなを^{マゴ}壺斗三升つき、その上に壺分三朱かかりぬ。容易なることにあらぬなり」(七月十日条)のように。武家の生活を背後で支えなくてはならない女性の秘められた苦勞がにじみ出ているような記述である。念のため、この時に餅配りをしたのは、畠山・保科・千坂・大室・本郷・御記録所・嶋田・黒井・草刈・猿橋・佐藤・小幡・小田島・白江・本田・武田・有江・畠山里治・草刈弟子・しんとう・有江藤蔵・むかえのお竹・こうぢや喜蔵たちであつた。いわ

ゆる快気祝いである。

(3) 竹太郎の「しいつ」の祝い

次に記しておきたいことは、甘糟家の長男竹太郎のことである。「昨日より学館の試業始まる。此日竹太郎の試業済む」(十一月六日)とある。「試業」の具体的中身については分からないが、これまでの勉学の成果を問うときが来て、此の日、竹太郎は一通りの学びを無事修了したようである。そして、その成果を御屋形様の前で発表するときが来たようだ。十一月二十六日の条に「此日屋形様御式台において執政御聴き遊ばさる。内の竹太郎もしいつ御選びなりし故はじめてしいつ(の脱力)なれば、小豆飯をたき保科金太郎・信蔵老母をよぶ。祝とてさば・中折・大つがる等、菓子・母へゆづ酒・袖口・ねぎ。登坂てい吉久蔵に酒くれる」という記事がある。「しいつ」の祝についての記事である。この「しいつ」とは「しえつ」、すなわち「私謁」のことであろう。

これだけの記述なのではつきりとしたことは分からないけれども、十一月六日の記事と合わせてみると、「試業」を修了したの中から選ばれて御屋形様の御前で、意見なり学んだ事柄などを発表する機会が与えられたものであろう。十一歳の竹太郎にとっては初めての経験であった。このことは、藩士の嫡子としては、出世の第一歩といってもよいような機会であったのではないか。選ばれたこと、初めての機会であったこと、これは、当家にとっても目出度いことであった。当家の跡継ぎの晴れ舞台であった。春たちは、早速小豆飯を炊き親戚を呼んで祝い事をしている。祝いにやってきた老母たちは中折・小つがる等の紙類を祝儀として持参している。竹太郎が学問レベルで認められたことを喜び、さらなる学問奨励を期しているように思われる。

そのことは、翌日の記事「上泉直歳昨日小判壹枚をいただく。これはよく難渋なれども書物を読みたること御前に達しいただくとて吹聴に来る」(十一月二十七日条)から推測できる。すなわち、竹太郎が、難しい書物を御前において読んだこと、それを御屋形様が聞き届けてくれたことなどがわかる。その歎びを上泉はわざわざ当家へ吹聴に来てくれたこと、またその時の褒美として上泉が小判を贈ってくれたことなどの歎びが記されている。

(4) 年末の様子

すでに、一―④に抄出したけれども、もう一度、武家の年末の様子について見ておきたい。当家の交際の様子をさらに深く知ることが出来るからである。「歳暮」という言葉が日記に登場するのは十二月二十六日からである。この日、斉藤のおば君が、甘糟家に一年の締めくくりの挨拶に来ているが、その時の贈品は「みやげ」と記され、くず粉・いかが贈られ、さらに家族それぞれに母へ砂糖、おなべに小ふくろ、子供らへはな紙、春へそうり(草履)が与えられた。一家は、こうしたおば君の訪問を大いに歓待している。親戚同士のあいだでの年末の過ごし方の一端を知ることが出来る。

また、この日、甘糟家からは、佐藤伴左衛門へ歳暮として「餅米一斗鮎七つ」を贈ったところ、替わりに「塩ざけ杓尺」がよこされたと記している。これを機に、年末の挨拶に人びとが来訪しはじめたようである。

十二月二十九日の条に「つめ(詰め)前にていそがしきことひげへ火のつくごとく、門口へはかけとり・はたり・やるのやらぬの大かけやい。門へは歳暮に来たる人へ酒・餅をくれるの混雑。すすはき・つめかひ・質屋の

やりくりはさておきて、品ものなければ質おかずたゞ／＼家内の達者をの(ママ)も第一となすのみ」と記しているように、十二月二十九日・三十日にかけて多くの人びとが年末の挨拶に訪れている。十二月三十日の条には「いろいろ事あれども忙がしきに取紛れて書かず」と記している。日頃から詳細な記録をしている春にとつても、年末の多忙さには勝てなかった。従って書き載せていないことも多かつたようで、この時の全貌を捉える事は出来ないが、記されている限りでの歳暮の贈答を見ると次のようである。

歳暮を寄せた者は二二件(註1)、よせられた品は、中折(五件)・小つがる(三件)・菓子(四件)・塩さけます(二件)・かつを(三件)・銭(三件)・その他(四件)である。また、甘糟家の方から贈った人は五人でその品は、かつを(三件)・餅米(二件)・その他(四件)であつた。

また、右に記した十二月二十九日の条が示すように、年末の挨拶として儀礼的に訪問する者がかなりの数に上つていたものと思われる。挨拶に来た人、歳暮を寄せた者たちへは返礼として酒・餅が配られたことであつたろう。人びととの儀礼の挨拶を終えた大晦日の夜、文字通りの一年の締めくくりを家族で祝つた。その様子については、先に記した一―④のとおりである。

三 武家女性の社会を見る眼

前節では主として当家の交際に関わる事柄を見てきたが、本日記が、単なる「接待記録」や「交流日記」ではないことは次に見るような記録によく示されている。いくつかの項目を立ててその様子を探ってみよう。

(一) 米不足をめぐって

秋の収穫前の九月に入ると、米不足が表面化してくる。その様子を春は書き記している。家の経済を担う彼女にとっては、米のあり方には関心を持たざるを得なかった。「またまた米不足にて買はれず、既に此日も千勝院来り米をはたる。これにより忝升くれる」(九月十五日条)という記事に始まり、「又々米なくして大難儀」(九月二十日)、「又かはら町太左衛門はたりにくる。忝升くれる」(十月七日)、「千勝院来り餅くひ行く」(十一月十五日)などのように当家へ米の無心に来るもの、さらには示さなかったが、泊まり込んで夕食・朝食などを所望していくものもかなりいた。

このような状況下で、春が綴ったこの件についての関連記事を抄出しよう。

① 「此日米のぼりて忝升四百文となる」(九月二十一日)

② 「二、三日前松原にて首つりあり大工なり。食ひようなくなりて死したるよし、あはれむべし」(九月二十四日)

③ 「此日米のぼりて拾七貫となる。姉とわれ保科へ餅くひに行く。母君は畠山へ行きます。みやげは豆腐と煎餅なり。新八酒のみ行く。兄君本郷に行きます」(十月一日)

④ 「米のぼりて拾八匁となる。白米忝升にて四百五拾文なり。此日より大根のくきかてを食ふ」(十月二日)

⑤ 「兄君の弟子来ること十人さき也。此日来る御ふれ米高く難儀なすものままある由聞ゆ。これにつき「かゆ・かて」を食ひ、なりたけのばしい申すべしとの事、又米あまりに高くよりどころなく新酒御じよう

ち仰せ出さるとの事也。皆よりどころなく氣にくわぬとて大きに笑ふ。もつともなり」(十月十四日)

⑥ 「わが御国米不足にて如何にもせんかたなしと皆申せども、御上にては一向にお構いなく酒田御下し米なされ候由。心ある人皆はがみをなす」(十月二十日)

⑦ 「又何処も米マメひそくにてわが国へ上の山・山形などより米の御むしん言ひよこせし由」(十月二十四日)

⑧ 「こぬか壺升六拾文なり。おそるべし」(十月二十五日)

⑨ 「御家中米高くて大きに難儀なすおもむきを屋形様蔭ながらお聞き遊ばし、ふかふか御あんじ遊ばされ竹俣御家老に米値段をお尋ねありしに、偽りて申しけるは只今は百五十文なり。御家中などは決して難いたすまじと申上げられしに、屋形様米四百文になりなば人死に出でんとてかねて御あんじ遊ばされし故かく申上げたる由。しかるに尚又米のことを侍頭に御尋ねありしに四百五十文なるよし申上げぬ。これにより竹俣御家老は偽りを申せし罪のがれ難きところなりしを、有難きことには屋形様御耳遠くならせられ御聞き違ひなされしとのこと故かく安穩にすみたるとのことなり」(十月二十八日)

⑩ 「米大きに下る。新米壺升にて二百九拾三文なるよし」(十一月四日)

⑪ 「世の中不景氣にておし買い、食い逃げ、こて盗み、大きにはやる」(十一月十三日)

⑫ 「酒井の嫡子うなぎを食い逃げしたる科により囀ひに入れられる。米値段定まらず。拾弍貫より十六貫まであり」(十一月十四日)

九月中旬から十一月中旬にかけて世上の米不足は、米価高騰・生活破壊という事態をもたらした。台所を担う春は、米価の動向を看過することは出来なかった。①③④⑧⑨⑩⑫などにみられるように、春はその行方を執拗

に追い続けている。(註12)

右に指摘したように甘糟家には、米・食の無心に来る者もあり、そうした者たちに対してそれなりに対応しつつも、自らもまた食に窮していたようだ。その様子は③のように、土産を持参して食を求めて親戚の保科へ向いたり、④にみるように、米不足のため「大根のくきかて」を食さなければならぬほどであった。

このような米価高騰・米不足は人々の生活を直撃、②のように食糧不足で首つり自殺をするものが出現したり、⑪⑫のように世の中の不景気のために、おし買い・食い逃げや盗みが行われていると嘆いている。

どうしてこのような社会不安・生活破壊が起きるのか。春の眼は政治に向けられている。⑤に記されているように、米が高く難儀するものがあることを承知しているお上は、なるべく「かゆ・かて」を食して食いつなぐようにという触れを出したが、そんなことでは解決にならないと批判的に受け止めている。そのような触れが出されても「皆よりどころなく気にくわぬとて大きに笑ふ、もつともなり」の記述には、藩からの触れに対する領民の不満や批判が強くなったことを示すとともに、そうした人びとの動向に春もまた同感している。そうした批判は、⑥のように、領下で米が不足しているというのお上は、お構いなしに米を酒田へ移送してしまい、領民のことを全くかえりみていないと藩への不満をつのらせていく。

批判はさらに増幅されていき⑨のように記される。ここでは単に漠然と不満を述べるに終始しない。屋形様(藩主)が家中の難儀を耳にし、家老に問うと、家老の竹俣が事実を曲げて藩主へ進言しているという。こうした現状をきちんと捉えようとしぬ家老への批判を明確にしていく(註13)。このような藩内の内実を一般の領民が何処まで察知していたのかは明らかではないが、すくなくとも春の場合には、藩士の家族の一員として知り得た

情報であったことは明らかである。このような批判的な記事は、兄およびその周辺の者たちの影響を受けたものであろうが、春自身の言葉でこのように綴っていることは留意されてよいだろう。

十一月に入ると米価は下がったという(⑩)。秋の収穫の時期になったからだろうか、しかし、状況は好転していないことは⑪⑫の記事が語っている。

(2) 長州の動向への関心

春の日記の前半を特徴づけるものに長州に関する記事がある。それらをとりあえず抄出してみよう。

① 「この日大目附ふれ来る。そのおもむきには、今度四月廿一日まで、毛利父子ならびに末家家老共おたづねの筋これあるにつき安芸まで来れとのことなり。もし来らざるに於ては二十一日限り御ちうばつ遊ばすべきとの御ふれなり。此のおふれは四月のことなれば、今頃は如何なる大変おきたるも知れねども、道遠ければさだかにわからず」(五月九日)

② 「(会津のさむらいの話) わが主人へ長州人不意におこりかゝりぬ。わが国の人々力をつくしふせぎをりしに、思ひもかけず横あひより薩摩勢斬つてかゝり総くずれとなりうたるゝ者かずを知らず。千人の人七、八百はうたれけん」(五月十三日)

③ 「誰云ふとなく長州の風説聞えぬ。四月廿一にはいよく毛利父子・末家家老の面々安芸まで出きぬ。^(ママ)しからかにその人数の大変なること、野も山も皆一面の人になり、いもりかいもりならざる程なりしかば、將軍家にてこのいきほひにや恐れけん。御尋ねの筋は後に致すべし、先づ此度は速かに帰れといふこ

となりし由」(五月二十五日)

④ 「此度長州浪人二百人ほど備中国倉敷御代官所へ狼藉いたし、行き方知れず候。これにより国々にて長州人と見なば他領といへどもふんごみ速かに打ちとり申すべきとの事なり」(五月二十七日)

⑤ 「先日の長州の風説はうそなりけん。今日ちやうへのお達し書の趣を聞きぬ。五月一日に長州より親子名代安芸へ差出せしところ、大公儀よりの御達し、毛利大膳父子禁裏への乱暴は知らざる事とはいへども、畢竟不行届き故かゝる大變も出でたるなり。しかればきつとも仰付られるべきところ、寛大なる思召を以て十万石お取上げ、大膳父子隠居国元において永塾仰付らる。かつ又先祖元就の勤功に免ぜられ、毛利おき丸へ二十六万石成下さる。此事五月廿日まで御請けのかへり事いたすべきとの事なるよし、毛利おき丸(マ)云ふに大膳の孫長門守の子也」(六月三日)

⑥ 「今日また大目附ふれ来る。その趣に毛利の末家吉川監物松平安芸守様に嘆き申して曰く、今度のお達しのお受を五月十九日までとの御事なれども、なか／＼国の評判きわまらず候。これにより何卒御慈悲を以て六月五日までにお日のべ下さるよう御執成たのみ奉るとの事なり。これにより五日まで日をのぼし、もし五日にお受せずは今後は一同討入るべきとの御ふれなりき」(六月十六日)

⑦ 「又かみ方の風説きこゆ。長州よりこんどもかきものにて五月廿五日に安芸へさし出だし、みなとにて待たんと云ひておきはなしにいたし、行きかた知らずなりしとぞ。その書き物のおもむきは、わが国もとより天下の為を思ひいたしたる事にて、忠臣とこそあれ不忠なること決してなし。然るに何ぞや、父子隠居十萬石御取上などとのことは決して御うけ成りがたし。是非寛大なる御指図くされたしとの事なるとぞ。

これにより今度は御うけなさざる上、かゝる心外なること申出でたる故、六月五日にはいよ御討入りの御ふれなり。此の前薩摩より上言して曰く、長州もとよりその罪にあらず。決して討たせ給ふことなかれ。もしわが上言を御もちひなく御征伐あるならば、わがいつ国おさしづを受け申すまじと申しいでたと云ふ事もきこえぬ。これよりはいかに行くことやらん、公方様はこれよりえい／＼大阪におわして、大小名の参覲も大阪にいたすようになるべしとの噂もきこえぬ。將軍大阪にあわする故江戸大きに米ひどく不足いたす由」(六月二十七日)

⑧ 「長州の風説聞ゆ。はしめのいくさによせて大きに敗軍なし、井伊公・さかき原公討たれたると云ふ沙汰きこえぬれど、かゝることはうそならんと云ふ話もありぬ。関東方敗軍のことはほんの事なるべし」(七月二日)

⑨ 「又長州の風説聞ゆ。先づ周防の山口の城といふは皆一面の山にして要害堅固武器兵糧を多く貯え、城の四方に八ヶ所のとりでと構えその勢あたり難く見ゆるとぞ。山口の城と云ふは十里四方あると聞えぬ。しかし嘘なるよし」(七月十一日)

⑩ 「又きく長州の風説、寄せ手の先陣小笠原図書頭様、岩国城を乗取りたるといふ事なり。長州一国皆山口に籠城なし、山の上へ大木大石を並べ大づつ小づつを備へ、ナカ／＼こう大なる様子なるとぞ」(七月十四日)

⑪ 「昨日お飛脚着く。そのおもむきは長州へ向ひし人々敗軍なし。手負い死人数しれずただ少し勝ちたるは、小笠原公と紀州公うち勝ち軍船二艘うばい取りたる由。(中略)これにより公方様・芸州まで御出馬なされ

るにつき京都御手うすになりたるにつき、わが国より御人数二百人お登せになるとぞ。侍組より五人、三手より三十人、又宰配頭・御使番など行くとぞ」(七月十七日)

⑫ 「長州はますます盛んにしてこれ迄の戦ひ数度に及べども一度もおくれを取らず、却つて隣り国をねらひよほど取りたるとぞ、かゝる世の中に將軍かくれ給ひなばこの末いかゞ成り行く事やらん、と皆申しけり」(七月二十八日)

⑬ 「いろ／＼とりどりの話聞ゆ。先づ長州御征伐は御見やはせと(ママ)の事なるよし。今度將軍大阪よりご病氣にて江戸へ下り給ふとの話もあり。又一説には御病氣ひらけさせ給ひぬといふことも聞えぬれど、これはうそならんか」(八月五日)

⑭ 「將軍かくれ給ひしにより一橋公に將軍の命くだりしに、一橋公うけ給はず仰せ上げられしには、今度長州征伐いたし天下へいき(ママ)んなさざるうちは御受けなりがたとて、すぐさま征伐にむかはせ給ひしに、官軍これをききていきほいさかんになりぬ」(八月二十八日)

⑮ 「上方の風説あり。先日の風説とは事違ひ此度はあしき沙汰にて長州の勢い盛んなることおびたゞしく、天下の浪人を集め一騎当千の兵五万余人あり。歳には十年の兵糧をたくわへ、これ迄たゞかひ何どに及ぶといへども一度もおくれをとらず(以下略幕府について言及)」(九月十四日)

⑯ 「上方の風説あり。長州勢さかんにして石州はのこらず取り、亀井公も降参なし今度上洛を遂げ、何等の科を以て我が国を御征伐の勅命ありしや承り届くべしとてきりなびけ、きり従へのぼるべし。安芸様などは降参とのこと聞こえぬ」(九月二十九日)

以上、長州の風説、上方の風説の中から主として長州に関する事柄を記録した部分を抄出した。長州征討のこと、將軍の動向、とくに病氣のことにまでかなり詳細な情報を捉えている。全体に長文にわたる記事が多く、長州勢の動向を綿密に追っている。時には、最初に書きとどめた事柄が、その後の情報に基づき「うそ」であったと⑤⑧⑨のように追記したりしているが、ともかく耳にした情報を素早く書き取っている筆力には目を見張る。

いずれにせよ長州と幕府と薩摩との関係に注目しながら長州の動きに焦点を当てている。一つ一つの記載内容の真偽はともかくとして、これだけの記事を書き続けている春の長州の動向のとらえ方に目をとめておかなくてはならない。大目付の触れをはじめ多くの風説に耳目を開いているということは、単に春個人の関心に留まるのではなく、幕末のこの時期、いわゆる長州征討という一件が、当時、如何に大きな関心事であったかを更めて知らされるとともに、多様な風説が飛び交っている状況に対し⑩に「いろいろとりどりの話聞ゆ」と記しているように、こうした事情を春もまた興味を持って対峙していたことがわかる。

そして、これらの記事が書かれている時期に注目したい。⑥⑦⑧などは、兄が病に臥せている時のものである。そんなとき、このような記事を春が書き留めているということは、兄の見舞客がもたらした情報であったに違いないことは、二一(2)で述べた通りである。

(3) 一揆をめぐる記事から

また、日記の前半部分には、社会不穩の様子を綴った記事も集中してみられる。

①「此のあいだは何となく世の中も騒がしくきこえぬ」(五月七日)

② 「この間、もの品高き故か所々へ一揆起きたるといふ話を聞きぬ。先づ信州へ一揆おこり、又伊達(桑折)こうをりへも起きたるよしきこえぬ」(六月十日)

③ 「今日、江戸より来る町たよりをきく。江戸はいとくさわがしく五月五日の日誰とはなしに高札を立てぬ。その趣に、かく物品次第ノに高くなり貧窮になるもひつきやう金持わがままにおのれのみこうえき致し、貧窮なるものはどこまでも貧窮いたすこと口惜しき限りなれば、金持共を破却いたさんと思ふなり。われと思はん人々は六尺棒一本つ携へ早速人数に加はるべきとの高札なりしとぞ。然るに五月廿八日よりもの持共おびやかし実に破却いたすよし。その人数のおびたゞしき事、二、三千余に及べるよし。六月に及びてもやまず。此の町だより来るころは、いとや大六というものゝ内、破却最中なるよし。いとや大六と云ふは交易いたし六拾万両もうけたるやつなる由」(六月十二日)

④ 「此日わが国より上下二百人、めんく手槍を携へこふりのいっきへ御加勢として行く。此の伊達(桑折)のこふりの一揆のおこりを尋ぬるに、世の中もの品高き上に公儀よりこたねのやく(蝨種)、又絹糸のやくをひどく取られし故、村々集り一揆を起し役人どもを討ちつぶすこと大変故仙台よりも御加勢なり。又福島よりも百五十人御加勢故わが国よりもつかはされしとぞ。しかるに一揆静まりたるよし申来るにつき、御引きもどしになりぬ(これは一揆の計りごとにて浪人より静まりたる由申し来るとなり)」(六月十九日)

⑤ 「世の中いとさわがしく一揆蜂起なすこと数知らず。大坂・江戸・越後の新潟・最上・伊達のこほり(桑折)などへ起きたる由。又昨日福島へ一揆おこりし由。その勢およそ八万三千人ほどおしよせしかば、板倉公より一揆の大將へ使者を遣はしことはりて申さるには、決してそのもとへはことざし致すまじき間、わが城ばか

りは許してくれるとわびられしとぞ。それ故か内福の町人八軒つぶせしとぞ。一揆の大將の名をおかの八郎といふとぞ。この一揆仙台よりわが屋代郷へも来ると云ふ噂故か、今日あまたの人数を警衛に代屋^{ママ}へ遣はさる」(六月二十二日)

⑥ 「先日の一揆静まりたるという風聞あり。三千ばかりの一揆と聞きしに、ナカノ大變なる人数にありたるよし。その勢八万人にて野も山も皆一面にておしあるきたる故、誰にてもてざし^{だカ}をなさざりしとぞ。かしらはあかね小八郎と云ひてその年六十二、三のぢゞなるよし。出生はこふりのはんだにて、一たび村の爲を思ひ同村の分限者てん六と云ふ者とあそひ、遠島になりたる奴の由。しかるに此の度大將八郎行き方知れずなりたるに付、皆ちりゞに離散いたしたるとぞ」(六月二十七日)

⑦ 「又々伊達・信夫へ一揆三千人程蜂起なし、前とはちがひその勢い大變にて陣屋ノを残りなく打ちつぶしますゞさかんになり、福島之城を攻めとらんとてむかひしと云ふこと聞えぬ。福島にてもふせぐこと^{ママ}たてしきりなるよし。こは百しようの一揆の中へ水戸浪人あまたはまり指図をなす故勢い盛んなるとぞ」(七月二十二日)

⑧ 「一揆の風説うそなりし」(七月二十三日)

⑨ 「嘘かほんか、宮内の熊野堂へ八百人ばかりあつまり一揆を起さんとして相談なし居る由を、藤藏洲の島へ行き、歸りに聞き来る」(八月十七日)

慶応二年は全国的に不作で、米価急騰状況は蔓延、同年五月一日には摂津西宮で米安売り要求運動が始まり、その動きは直ちに周辺地域に広まった。①の記事は、そうした上方の情報などが伝わってきたことを示している

のかも知れない。また、五月十八日には武蔵国荏原郡では「困窮難渋人」が徒党に立ち上がり、五月中下旬からは江戸の町々にも米安売り運動が始まる。③はそうした状況下の江戸の様子を捉えている。

さらにひきつづき一揆について、なかでも桑折の一揆が中心に述べられる^(註14)。②③のように、物価の高騰が連鎖的に各地に一揆を波及させていったことが語られる。その原因は、③に記されているように「こうえき」、すなわち開国に伴い貿易が開始、蚕種や生糸などが輸出されるようになったことを指している。そこで「高札」^(註15)を建て、貿易によつて暴利をむさぼる商人へお灸をすえよう、そのために賛同者は立ち上がれと呼びかけた。それに呼応して騒ぎは拡大、信州・越後・福島などの各地で一揆が起こされていったことを記している。これらの地はいずれもいわゆる養蚕製糸地帯であり貿易の影響を強く受けたところであつた。春の眼がこうした社会経済の現象へも向けられていたのは、後述するように彼女もまた、日頃から養蚕製糸に多少なりとも携わっていたことも関係しているだろう。ともかくも④⑤⑥と一揆に関する情報が詳細に語られている。

また、これらの引用の中で⑦が示しているように、この時の一揆に水戸の浪人が加わり指図をしているという記事が目をはひく。水戸の浪人といえば恐らく「攘夷」と不可分のものと受け止められていたであろう。そのような者が加勢していたという叙述から、当時の人びとにとつてこの一揆の「交易」への不満は、貿易商人への批判に止まらず、その先に「外国」がイメージされていたかのようにもみえる。そして、春もまたこのような認識を持っていたであろうことが推測されるところでもある。

(4) 屋代郷の加増をめぐつて

春の眼は藩政にもしつかりと向けられている。

① 「一昨晩えどよりお飛脚つき、此度出羽の国御預り所の内屋代郷三万石こみ高としてこれを下さると云ふ御飛脚にてありし故、御国中大よろこびなり。これより十八万石にならせられ、三日およろこびなり」(七月一日)

② 「この度屋代郷三万石もらはせられ候につきては大変なる御祝にて三日三夜の大きか盛り。御家老はおどりはねるの、宰配頭はさいとう舞、六人年寄さいとう舞みさいなくと片肌ぬぎにねぢり鉢巻にてはやすもあり、なか／＼その賑はしきこと筆に及ばず。それより御家老役人共をめし連れ松の御奥へお悦びに行くとて、さながら足はさだまらず、よろ／＼ひょう／＼として行かれしところ此節大橋御普請にて人足共大勢集まり居り候ところ、御家老声かけかかるめでたきこと又とあるべからず。汝等わがあとをつきて来よ、酒のませんと云はれしに人足共大きによろこび一同松の奥へ行く。御奥にて酒の大せつたい始まり、はねるおどるに大きわぎ、前代未聞の事どもなり。酒一杯にて七十五文なり」(七月四日)

③ 「この度屋代郷三万石御頂戴遊ばされ候に付格別なる思召を以て、二ツ四分の内壺ツ也。新米の相場を以て成し下さる。又式拾五石以下へは壺両下さるとの事なり。誠に有難き事どもなりと御家中さゞめき祝いぬ」(七月二十五日)

④ 「屋代郷御私領になりてお上より御触出になりたるとも決してみだりに行くまじく、今迄と同様たるべきの御ふれなりし故然か心得居りしに何ぞやお上にては竹俣御家老を始め中老・郷の役に至るまで御政治をかまはず、屋代郷へえんばに行きうまき物を出させ、あくまでに食い帰り給ひしとぞ。(こは廿二日のこと

也)。かつ又お上にては(ママ)にた大栗おしにて、これ又屋代郷へきのご取りに行き給ひぬ。お上にてのみ行かせ給ひ、下へは行くなといふ事故尚がやゝと上をのゝしる」(八月二十一日)

⑤ 「先日屋代郷拝領遊ばされ候につき、それぞれ御加増あり。先づ竹俣御家老にはよく忠勤をつくすにより子孫永々二百石これをなし下さるといふことなり。荳戸孫惣にも永々百五十石成下さる。これは父の忠義をおぼしてなり。同治命にて大国筑後これまた永々五拾石御加増、又長尾一せい齋・千坂伊豆殿もその身一生十人扶持下さる。一せい齋には御脇差下さる(千坂へも御脇差なり)。六年年寄嶋田多門は屋代郷の乱の時は千辛万苦してようゝ治め、かく御頂戴遊ばされたる時は御加増にもあるべきに何もなく居ること畢竟上々の人に憎まれる故ならん。いと恐ろしき世の中なりとて心あるともがらは口をつぐみ物言はず、いとゝ苦々しくぞ見えにけり。今度新保の下りは此故なり。島田多門は御あほりを拝領なす。大滝新蔵は二十石若林作兵衛は三拾石子孫永々下さる。毛利・島津は白鞘の御刀を下さる。平林隠居は御羽織、黒金・深沢隠居へは御錦、これにつけても島田はいたみ入らぬ者もなく、御家老をこなさぬ者もなし」(八月二十七日)

⑥ 「屋代郷ものさわがしきよしなり」(九月十九日)

⑦ 「昨夜屋代郷上新田村与次郎といふものゝ宅へ狼藉者はある」(九月二十四日)

⑧ 「昨晚屋形様公家衆・侍頭・宰配頭・六年年寄御夜話に召出され、屋代郷拝領あらせられ候につき高家衆・侍頭へは(ママ)さんかいを下さる。宰配頭・六年年寄へはたちぎゝを下さる」(十月二十四日)

十五万石の米沢藩が、幕府からの預かり地であった屋代郷三万石を拝領されることとなり国中が沸き立ったこ

とが記されている。しかし、それはもっぱら藩の内部のことにすぎず、この時の領民の動向は分からない。藩では、②にみるように家老を中心に大喜びをしたという。何日にもわたり酒宴を開き大騒ぎをしたことがつぶさに述べられている。そして、その加増に伴う配分のことなどが記されている。具体的には③のように領内では年貢の軽減および二十五石以下の者への一両の下賜金があること、また、藩内では④⑤⑧などに記されている通りである。この件についてはほぼ右に抄出したが、春の記録の論調からすると、拝領の喜びは恰も家老竹俣の独りよがりとも思えるような記述内容になっているように見える。そして、その喜びは上の者のみで、下の方には届いていないこと、加増に伴う家臣たちへの配分のあり方についても問題があることを指摘する。嶋田多門を具体例として示し、上の人に憎まれると正当な評価がなされないこと、それはまさに「恐ろしき世の中」であり「心あるともがらは口をつぐみ物言はず云々」の記述には藩内における意見の対立、藩政への批判を口にするには許されないような状況があったことを指摘、その上で、そうした事柄を嫌悪するような春の心情が吐露されている(⑤)。

一方、幕府御料から私領に支配替えとなった屋代郷の領民は、⑥⑦のように行き先の見えない状況に不安をつのらせている様子や何かしら不穏な状況がうず巻いている様子が示されている。江戸時代、幕府の都合によって行われる支配替えが、その配下の領民たちにどのように響くのかを知るよい手がかりを書き留めてくれている。

(5) 将軍への関心

春は、政治の頂点に立つ将軍の動向にも心を寄せている。

- ① 「いまだ御ふれ出しにはならざれども、將軍様脚気のしようしんとか云ふ病をやみてかくれさせ給ひぬとも聞えぬ。何れにしても大変なること也」(七月二十八日)
- ② 「今度將軍大阪より御病氣にて江戸へ下り給ふとの話もあり。又一説には御病氣ひらけさせ給ひぬといふことも聞えぬれど、これはうそならんか」(八月五日)
- ③ 「將軍かくれ給ひしにより一橋公に將軍の命くだりしに、一橋公うけ給はず仰せ上げられしには、今度長州征伐いたし天下へいきん(ママ)なさざるうちは御受けなりがたとて、すぐさま征伐にむかはせ給ひしに、(中略)今度御ふれ出しになりし趣には、將軍御病氣をもらせ給ひ御心細く思召し、御あと目を一橋中納言様へ、何ぞありし時は御譲り遊ばさる間しか心得候様との事也。且又長州御征伐は御心にかけれ、一橋公に御征伐せよといふ事也とぞ」(八月二十八日)
- ④ 「此日きたる御触れ八月二十日卯の刻大阪御城において將軍御病氣重らせ給ひかくれ給ひぬ。これにより普請・鳴物・御じょうち仰出され候。鳴物御免の儀は追て仰出されべく候との事なり。実は七月十九日にかくれ給ひぬとのこと也。いといたましき事なりと申しあへりぬ」(九月四日)
- ⑤ 「一橋公芸州まで御名代として御進発あらせらるべしとて御簾の御ほとりにて天杯御頂戴も相済み、既に発たせ給ふところへ大阪より早馬到着、大阪へ長州よりきつて上るとの風聞、又いきほい盛んなる様子など聞えあげしかば、先づ御進発は御見合せ大評判となりなほ大阪にて諸大名を集め討つか和談かの御評判あるよし」(九月十四日)
- ⑥ 「上方の風説あり。一橋様御家督に立たせ給ひしに服さざる人まゝありしところ、二条のお城において一橋

公を刺し殺し、伏し重なりて腹を切りたる者ありとのことなど聞えぬれどさだかならず」(十月八日)

⑦ 「此の間聞く風説には一橋さまいたみ入りたる事なり。長州にてはいよ／＼関東をあなごる事ぬ僕のごこと(ママ)く、又薩摩にてはてんしょう院様に偽りて申すようまことやらん。水戸にては一橋公を立てたきまま今度大阪にて將軍を毒殺したるよし聞えぬ。且又今度ばかりでなき由。せん／＼將軍、先將軍ともに今度三代を害し奉り、こん度一橋公江戸に下りてんしょう院様をも害し奉るべしとのこと聞えぬ。恐ろしきことならずや。決して御油断遊ばすなと申せしかば、天しょう院様大いに怒らせ給ひ一橋公江戸に下りなば、われここに居るまじと怒り給ふ故、一橋公はなきことを言はれ江戸へも下りかねかく京都におはすよし。薩摩のはかりごとを恐るべき事なりと皆人申せり」(十月二十七日)

⑧ 「此度下りし人の話には、一橋公評判京にて大きによろしき由」(十二月十一日)

⑨ 「又一橋公毒殺されしともいふ風聞もあり」(十二月十二日)

將軍に関する記事は以上のようなものである。十四代將軍の病氣と死についての記事、及びその跡を継ぐ一橋公に關する事柄などが綴られる。一橋公の家督の問題、水戸の見解、一橋公の世上の評判から暗殺問題にいたるまでの話題が当時の世上に蔓延していたことが知られる。さらに薩摩出身の天璋院をめぐる動きなども含めて複雑な絡み合いがあったことを風説を口実にしてダイナミックに綴られている。これらの多くの記事は、甘糟家が藩の中樞に深く関わる存在であったということで掌中に出来た江戸や上方からの情報であったであろうが、いずれにしてもこうした事柄の詳細が、春の手によって記されていることを見落とすことは出来ない。

(6) 江戸の様子から

当時の江戸の様子は春の眼にどのように映じたのだろうか。

① 「江戸にては異人の真似をし旗本の若き者などはラシヤの縫いつめにどろくつをはき、大小をさゝずうしろに剣を帯びあるくにより、大目附触れに西洋流の調練を盛になすはもとよりの御趣意に候。しかれども常には決して西洋の真似致すまじきとの御ふれなり」(五月二十七日)

② 「今日、江戸より来る町たよりをきく。(以下三一(3)―③参照)」(六月十二日)

③ 「江戸大変に焼けたる風説あり。此九日、五ツより神田より出で江戸繁華の地残りなく焼けたるよし。かゝる世の中にあるならば、又もとの武蔵野の原になるべしとのこと也。実はつけ火にて繁華の地は所々よりもえ立ち、東北へやけぬけ向島まで焼けたる由」(十一月二十日)

④ 「江戸にては御改革にて上下をやめ、登城をなすにもぬひつめを着、大小をさゝず剣をおび、髪をたてかつそうとなり、まるきり西洋人になれというお触れなるよし」(十二月三日)

などの記事が見られる。この日記には、既に見たように、長州・上方への関心が多く見られるのに対し、江戸に關する記事は少なく、この頃の政治的動向の中心が、大阪と長州とに集中していたかのように見える。春の関心・兄の関心そして世上の関心など複雑に絡み合つての結果であろうが、一見すると恰も江戸はちよつとした工アポケットのようであつたかにもみえる。しかし、そこに語られている事柄の中には「交易」「異人」「西洋人」などといった言葉がみられることからみて、江戸は、他とは違つた意味合いをもつて人びとに對峙していたように思われる。すでに(3)でもふれたように一揆・騒動の発端となる「交易」に対する批判が組織化されていく

有様は、開国がいかに素早く江戸に影響を及ぼしていたのかということが分かる。そして、開国に伴う社会変動が、以前からくすぶり続けていた人々の政治への不信や不満に火を付け、これを機に広範な一揆が各地に引き起こされたこともすでに見た通りである。その意味では、対外関係を軸にして、江戸はやはりいろいろな意味での中心地であったことを再確認できるとともに、春の「西洋」への注目の一端を垣間見ることもできる。

(7) 「夜話」について

日記には、兄が夜話に呼ばれたり、兄の所へ夜話に来るといった記事が見られる。そのような記事を抄出してみよう。

- ① 「小幡てい助兄君に今夜夜話に御出でくだされとてくる」(五月十日)
- ② 「夜登坂てい吉筆一本もち夜話に来る」(五月二十一日)
- ③ 「大室大八夜話に来ます」(五月二十八日)
- ④ 「昨晚兄君、丸山駒太郎へ飯前より夜話に行きます」(七月十九日)
- ⑤ 「宮島掃部夜話に来ます」(九月六日)
- ⑥ 「夜千坂与市話に来ます」(十月六日)
- ⑦ 「昨晚屋形様公家衆・侍頭・宰配頭・六人年寄御夜話に召出され、屋代郷拝領あらせられ(以下三―(4)―(8)参照)」(十月二十四日)
- ⑧ 「此日、黒井・歌川・登坂・穴沢夜話に来る」(十一月二日)

などである。この外に単に「よぶ」「呼ばれいく」と記されているものも多く、呼んだり呼ばれたり、キャッチボールをするかのように、当家と兄の知人との間の行き来は多い。情報の交換、意見交換が活発に行われていたことの証左であろう。そして、その相手の多くは同僚の藩士たちであったこともすでに見た通りである。

(8) 家の経営に関わること

甘糟家の経営はどのようなようになっていたのだろうか。関連記事を抄出してみよう。

① 「保科とうぞうわらたをかりにきたる」(五月八日)

② 「兄君堀金村へとりたてに行き玉ひぬ(中略)この日けない総ががりとなりて茄子をうえる」(五月十四日)

③ 「保科力馬・藤蔵吉江の桑こきに來り、わがところにて玉をかくれろとて菓子一本もち來る。本田おうん(番)おこ見舞に來る」(五月十六日)

④ 「この日下屋敷へ豆をまく」(五月十七日)

⑤ 「われ齋藤屋敷へ桑こきにゆく。保科藤蔵・弥五郎くわこきに來る」(五月二十三日)

⑥ 「保科藤蔵來る。桑の余りしを取りに來たるなり」(五月二十七日)

⑦ 「本田おうんわらをもらいに來て飯をとうふにて食い行く(中略)今年の繭のとりちん、拾匁とりて百文なるよし」(五月二十九日)

⑧ 「本田おうん、おさのこたねをもつて來る。夏こなり」(六月一日)

⑨ 「桑鳴れい次桑のことにつき来り」(六月十三日)

⑩ 「保科まきまに絹糸の事頼みし故くる」(六月十八日)

⑪ 「今日より大根まきにくる」(六月二十日)

本日記には経営や労働に関する記事は概して少ない。そのなかでは、五月から六月にかけて野菜の種まきや養蚕に関わる記事が中心であるが、六月中旬以降は、先述したように兄が病に罹ったためであろうか、見舞いなどの記事が多くなり、養蚕など経営関係についての記載が見られなくなる。従って、当家の経営といっても抄出した記事から見ると、②④⑪にみられるように、二〇〇石の土地からの収入(ここでは米が主)を軸にその外には自家消費用の蔬菜などを適宜家の周辺で作る程度のものであったと思われる。また、注目されるのが養蚕であり、一定の規模での営みがなされていたようである。全容を知る事は出来ないが、①のように「わらだ」を調達に來ていること、③⑤⑥などに見られるように、「桑こき」つまり桑の葉を摘む記事や③⑧のように「おこ」「こたね」などの記載が見られることは、明らかに養蚕と関わっていることを裏付けている。また⑦のように「繭のとりちん」の相場にも注意を払っていることに留意しておきたい。そして「兄君福島へ行きます。この時御頂戴なりしきぬ糸壺両に参拾九匁綿のぼりて百文に四匁目になりぬ」(九月二十七日)などの記事も、春が日頃から養蚕製糸に関わっていることからくる関心ゆえのものであろう。

(9) 春個人に関わる事柄

最後に春の行動を示すもの、春の意見や考えを示しているものなどを抄出しておこう。

- ① 「われ甘粕へ草紙読みにゆく」(四月二十七日)
- ② 「われ齋藤屋敷へ桑こきに行く」(五月二十三日)
- ③ 「又今日もわれ桑こきに行く」(五月二十四日)
- ④ 「内村おうん、われに糸の染めよう習ひたきとて来る」(六月六日)
- ⑤ 「内村おうんも染物にて来る」(六月十五日)
- ⑥ 「われ井内おふさおぼこなしをしたるをよろこびに玉子をみやげにもちゆく」(六月一日)
- ⑦ 「われ春日へ産のよろこびに行く。あらみやげなり」(六月六日)
- ⑧ 「われ畠山へおぼこなし見舞に行く。二百文もちて」(八月二十一日)
- ⑨ 「われ高梨の兄君の祥月により、豆腐と酒一すず土産に持ち行く」(五月二十二日)
- ⑩ 「わが友五人来る。ぼた餅を出す」(十二月十八日)
- ⑪ 「(会津藩は)お上より此上は上下共に心を合せかせげとて江戸より唐木綿を織る者をかゝへ大きな長屋を建て、家中の婦女子にこれを習はせ、お上にて元金を出しこれを売り、よく世話をなし給ふ由聞え、わがお国にてはこれをうらやみをりぬ」(八月十九日)
- ⑫ 「ある人の教へに四海皆兄弟なり。つとめよかしと云ふことあり。然れども兄弟の如くには思はれぬなり。われ心ありて あさましく 悲しく思ふ 夜もすがら 身の行末ぞ 思ひやらるゝ」(七月十三日)
- ⑬ 「(佐藤伴左衛門へ歳暮を贈ったとき) 又兄歌をよみやり給ひしかばその返歌を下女夜持ち来る。これにより下女に餅をくれる。かゝる下女にまで気をかね、まいすをなしをること、いま〜しき事ふべんほど悲し

きことはなかるべし」(十二月二十六日) (註16)

⑭ 「此の日昌寿院様・おつゆ様・お猷様・おあや様鳳台寺へ御遊山に出させられ、御帰りにわが前を通り給ふ。まつ御かみかたを伺ひ奉りしに昌寿院様・おつゆ様の御年若くましませしと、御くらしいの高くわたらせ給ふにはたまげ申候」(五月八日)

⑮ 「(過日の話だとして記すある人の妻が) 松田屋へ行き、われらの夫京都留守にて何ともせん方なし。帰り給ふ迄米三升かしてくれろと頼みしかどかさざりしかば、此女当惑なし夫帰り給はゞいかにもなすべし。借りたる米を返す証こはこれなりとて即座に黒髪を切り出せしかば、松田屋感じつゝ三升の米を貸しやり番頭に言ひつけ、彼の女の内をただし翌日米四斗五升と錢五貫文を贈りぬとの取沙汰なり。(米壺斗の間違なり。ぜに一貫文なるべし) うすくはわかりしかど、苗字は云はずと、松田屋の評判大きによろし」(八月二日) (註17)

などは、春が自分の行動および考えなどについて記したものである。これからすると、春は、①のように、草紙を読みに行っていること、これは学習にいつているのか、個人の趣味なのかは明らかではないが、それなりの学びをしていること、②③のように「桑こき」の作業を行っていること、⑥⑦⑧⑨のように親戚知人に慶事などがあつたようなとき、祝い事に出向いていること、④⑤のように染め物の嗜みがあるのだろうか、教えてほしいという者がいたこと、⑩のように友人が寄つたりしていることなどが生活の中での春自らの行動を記した事柄である。

さらに⑪の記事に注目したい。これは会津藩では唐木綿を織る者を江戸から連れてきて、長屋を設けそこに家

中の「婦女子」を集め技術を習わせるといふ情報を耳にした春は、そうした会津藩のやり方を羨望する思いでこの記事を綴っている。幕末のこの時期、武士の経済的窮乏事態に対し多くの藩は何らかの手を打つ必要に迫られていた。そんなとき、会津藩では、藩主が率先して織りの技術を導入して産業を促そうとしていた。そんな会津藩の動向があるのに対し、何の策も講じない「わが国」（米沢藩）の不甲斐なさに如何ともし難い思いをつのらせている。見方を変えれば、このような記述の背後に、この頃の藩士の女性達の抑えられた労働意欲が潜んでいるようにも見える。少なくとも春のこのような記述には、女性達の力をもっと有効に活かしたいという思いが根強くあつたといつてよいのかも知れない。そうした女性達の欲求を十分に発揮させえなかつた制約は何であつたのか、今少し詳細な検討がなされなくてはならないだろうが、ここではその事を指摘するに留めておく。

また⑫⑬⑭⑮などには春の人間としてのまた当時の女性としての観念が吐露されている。⑫のように、教訓として常日頃心得ておかなければならない隣人との調和の問題については、観念としては分かつていても、実際のところではなかなか言葉通りにはいかないことを嘆息していること、そしてそうした思いは⑬にも連動している。なぜ下女にまで気を遣わなくてはいけないのか・春の露わな心の葛藤の様子がみられるところである。さらに⑭⑮からは、春にとどまらず恐らくは当時の武家女性の観念とされていたものといつてもよいような思いを知ることが出来る。すなわち、⑭のように上層の女性達の装束や振る舞いに、近寄りたいたい雰囲気や高慢さを感ぜつつている事、⑮の議論のように黒髪は女の命であつたことに春もまた共感したに違いない。いずれにせよ、このような叙述の中に筆者の心の内面が素直にあらわれている。

おわりに

以上、武家女性の日記について聊かの検討をしてきた。この日記を編輯した人は、交流日記であり接待の記録として高く評価している。その言に異論はない。一・二で見たように、本日記を通して幕末期の武家社会の様子を具体的に知ることができる。二〇〇石とはいえ、米沢藩にあっては上層に位置し、藩政に深く関わっている藩士の交際の実態がよく分かる。如何に家格というものに拘泥せざるを得なかったのかが語られている。藩士相互の交流の中からどのように彼らなりの枠組みが形作られていくのか、その作られ方の一端を見ることが出来た。こうして作られた枠組みは自分たち武士の体面であったといつてよい。そして、その体面を保つためには、それなりの努力と苦労とが払われた。ここでは、接待・もてなしのあり方に集約されている。そして、それを支えていたのは春であり兄嫁たち武家の女性たちであった。春が、招待され出向いていく兄から先方の接待のあり方を執拗に問いただしていた事によく示されている。そして何よりもこの日記を書き始めた理由も結局はそこにあった。

しかし、この日記は、その書き始めたその理由以上に重要な問題を持っている。それを主として三で扱った。できるかぎり春が、幕末の政治・経済・社会にどのように対峙していたのかを知るために長文の抄出を試みた。おそらくはじめから少なからず社会への関心を持っていたであろうこの日記の筆者が、兄やその周辺の藩士たちを通してもたらされる諸情報を通じてさらに広く深く社会へと目を見開いていった様子を辿ることが出来る。幕末期の複雑な諸情勢の中で、長州の一件、貿易開始に伴う経済社会の変動、將軍の死と交代後の新將軍の

動向、自分が所属している藩・藩主・家老のことなど、どれをとつても重要な事柄ばかりである。そうした事柄に大きく目を見開いている春の姿勢と見識とに更めて留意しておきたい。

そして、時折見せる春の心情、おそらく武家女性としてたき込まれたであろう教訓、そこから導き出されるかくあらねばならないという理念と自らの心情との葛藤、二十三歳の女性が抱く人間としての煩悶とそれとの苦闘などが素直に記されていることも看過するわけにはいかない。わづか八ヶ月の記録とはいえ、その中にはまだまだたくさんのお宝が潜んでいるけれども、とりあえず本稿はこれで擱筆する。

(二〇〇七、九、二五)

註記

- (1) 『米沢市史編集資料』第三号 米沢市史編纂委員会 一九八一年 以下『塵塚日記』の引用は本書による。なお、文中の「画」は、五五頁の図に示したが、これも本書に収載されている。また、史料右脇の()は、編集時のものに加え、引用者菅野が適宜付加した。
- (2) 本日記の編纂者は、本日記を「交流日記」であり「接待記録」であるとしている。
- (3) 安政元年稿を起こし、文久二年完結。甘糟継成編輯 鷹山公偉蹟録刊行会 一九三四年
- (4) 四月二七日条「われ甘粕へ草紙読みに行く」という記事がある。
- (5) 兄の許には、常時幾人かの弟子がいた。「佐藤なにがしねり羊かん三本持ち来る。兄君に書物を教へ給はれとてなり」(九月十五日)、「書物ならひに来るもの十一人なり」(十月十九日)、「書物習ひに来るもの十二

人」(十月二十二日)、「書物習ひに来る人八人なり」(十月二十三日)、「書物習ひに来る人へ酒を出す。七人なり」(十月二十四日)、「書物習ひに来る人十二人」(十一月六日)、「太田要作書物習ひし御礼とて壺(せき)持ちくる」(十二月四日)などの記事からも分かるように、「書物習い」という名目で、常に十人前後の弟子がいたようである。彼らの具体相は分からないが習い物が終わった後には、酒飯がしばしば振る舞われている記事があることから、弟子とはいえ、一定の年齢に達したものが多かったようである。

(6) 慶応元(一八六五)年の「分限帳」によると、米沢藩の士族は五四九〇人、陪臣を含めると約六〇〇〇人、米沢領一五万石に対する士族数は、他藩の三から四倍に達するという。それらの藩士は家格により上級の侍組、中級の三手組(馬廻・五十騎・与板)、下級の三扶持方・手明・足輕から構成され、それらは身分によって職種と俸禄が定まっていた。そして、これらのうち、下級士族が約八割を占めていた。甘糟家は、侍組に属していた上級士族であった。文久二年の記録によると、甘糟備後は「馬上二〇〇石」であった。

(『米沢市史』五三〇頁)

(7) 本文でも触れたように、上級士族の侍組に属した甘糟継成は、生まれつき鋭敏で、十歳で興讓館に学び、十七歳で家督を継ぎ、以後学館諸生、定仮助読、友于堂助読になるというスピード出世ぶりであった。慶応元年には、記録所頭取に任命されて以降は、本人も、その使命を自覚し、藩政の推移をまとめようとするが、結果は志半ばで果たせなかつた。なぜなら、慶応三年、上京を命じられ、以来戊辰戦争に関わり多忙な日々を送り、戦後、新政府に起用されたが、明治二年十一月二十九日に病没した。三十八歳であった。

また、兄は桃之助(編集者の註によると「齋憲公の第四子で支侯第六代勝賢君」のこと)の教育にも携

わっていた。「此日桃之助様御下りにつき兄御出迎に出来ます」(十一月二十五日)、「此日桃之助様御しきょう濟みにて兄君いろいろ拝領、まづ、中折五帖、小つがる一束、扇子一本、又酒五升なり」(十二月十四日)「兄君御殿へ御用につき出ませしところ、屋形様より御樽三升下さる。よく桃之助様に御相手をなされし故とてなりとぞ」(十二月二十九日)などの記事は、これ以前の「兄君御政治所において御樽六升拝領します」(十二月七日)、「此日兄君御前において御上下拝領なし給ひぬ」(十二月八日)などの記事とともに、とくに桃之助の相手をしたことと深く関わっていると思われる。

(8) (6) を参照

(9) 村人への応対をみよう。「中田の三郎右衛門米をもち来り、豆腐にて飯と酒をくれる」(七月三日)、「小野川与左衛門わらび干を持ち来る。玉庭三右衛門来る。此二人へ飯をくれる」(八月二十四日)、「堀金村市右衛門ふくで餅持ち来し故ひらぎ^(ママ)にて飯をくれる」(八月二十六日)などの記事がある。当家が支配していた村から適宜米などの産物が届けられているが、その際には必ずといってよほどに酒飯を振る舞っている。

(10) この日記を編集した人は、草刈道格について「外様法体、五人扶持、五俵四斗一升」という註を付けている。米沢藩の医師には、外様法体と外様外科とがあり、一代限りでその格式に編入される者もあったが世襲が多かった。外様法体の医科は、有壁・中條・富沢・草刈ら十四の諸家であったという。『米沢市史』七三二頁。

(11) 複数でまとめて寄せた者もあるので実際の数は多くなる。

(12) 米価については「京のもの品高きこと壹貫文に米九合」(九月十四日条)とも記している。

(13) 家老竹俣への批判は隠然とかつ広範に存在していたようである。たとえば「此間の話なるよし。竹俣御家老の玄関へ深編笠に面をかくし、大小をさしもの申す〜といひしかば取次のもの出で何の御用と尋ねしに、彼の者答へて米五升売り給へといふ。取次の者御家老にかく云ひしに、御家老米五升をあづけよ米売りにはなきとよくことわりやれといはれしかば、彼の者にかく言ひしに、われもらいに來ず買ひに來しなりとてふところより錢百文出しこの中より取り給はれと言ひしなどのおとし話の如き風説あり」(九月六日)の記事が暗示している。

(14) 開港後、横浜より輸出される蚕種が増えその需要増大に伴い粗悪な蚕種が出回る。幕府はその取り締まりのため生産者に鑑札を發行、その改印のため冥加金を徴収することとなる。いわば新しい税である。その改印が慶応二年五月から行われる予定であったため、代官所が置かれていた桑折が一揆の標的となった。

(15) ここである「高札」とは、幕府が建てたものではなく、一揆・騒動を組織しようとしたものが建てた呼びかけの看板を指している。

(16) 佐藤という人物は、「五十騎、二十五石 造塩硝御用掛」であるという。日記によると当家の方から歳暮を贈っており、当家とは常時交流があり、兄はかなり気を遣っている。

(17) この記事は間接的なものであるが、春がこのような記事を書き留めているということに留意したい。夫(ここではおそらく武士であろう)の留守中の生活は妻が全面的に背負わなくてはならなかったこと、しかし、経済能力がない場合には、このような形、すなわち腰を低くして半ば物乞いでもするかのよう商人に

対して助けを請わなくてはならなかったこと、借物の証に女の命とされる黒髪を切ったことなどに対して春はおそらく同じ武家の女性として少なからず共感するところがあったのであろう。

(参考)

表1 到来品のリスト

中折・半紙	5件	酒	7件	菓子	40件	いか	9件
筆	1	米・餅米	8	羊かん	10	(かつ)ふし	7
扇子・末広	4	茶	14	せんべい	18	(かれい・あじ) 浜焼	5
半衿・風呂敷・手拭	3	味噌	2	時雨の松	11	どじょう	5
おしろい	1	白玉・葛粉	5	白雪	7	ほしこ外	30
ローソク	4	砂糖	5	餅	12	昆布・のり	2
附木・まき・わら	6	そうめん・ひやむぎ	16	団子その他	20	酒肴 いなご他	9
糸・かせ	3					とり	4
ござ	1	玉子	22	きのこ・松茸	10		
銭	9	豆腐・油揚げ	6	わらび・ぜんまいなど	8		
		重詰・煮物など	7	豆類	6		
				きうり・茄子	4		
				梅・まくわなど	10		

表2 贈品のリスト

扇子	1件	酒	6件	菓子	20件	いか	8件
線香	2	茶	2	羊かん	5	ほしこ外	13
袖口	3	味噌	2	せんべい	10		
唐糸・糸かせ	6			餅ほか	7	とり	1
びんつけ	1	そうめん	2				
銭	6			豆類	4		
		玉子	8	きうり・茄子・大根など	6		
		豆腐	7	梨・ぶどうなど	4		
		重詰・煮もの	2	まいたけ	1		

表3 接待時の食品

酒 飯	115件	帆立貝・鳥貝	43件	菓子	17件
酒	118	にしん・数の子	35	せんべい	8
飯	82	鮭・塩引・ます	20	羊かん	8
茶	66	ほしこ	8	(ぼた)餅	21
豆飯など	21	浜焼(あじ・鯛)	5	団子	7
そうめん・そば	10	昆布・のりなど	17	まんぢう・もなか外	21
豆腐	42	あじ・鯛など	52		
玉子	36	鯛・かれいなど	12	大根煮・おろしなど	10
吸物など	15	その他肴	21	茄子・きうり	5
煮物	38			豆類	12
漬物	7	すもも	1	ごぼう	4
		まくわ	1	菜類	6
		白ぶどう	2	きのこなど	9

(註) 甘糟家の贈答・接待の様子を知るために、日記中に記されている事柄を表1、表2、表3の項目にわけてまとめた。